

吾平を中心とした大隅の魅力と驚きの再発見！

第4回 吾平観光の魅力と不思議

令和2年9月12日（土） 講師：朝倉悦郎

今回は、講師の私なりの吾平地域の名所について、4地域に分けてお話します。その中には一般には知られていない意外な事実や場所、成因なども入れました。ただし、吾平にお住まいの方は、よくご存知の場所が多いので、退屈な所は我慢して下さい。

1 吾平山陵近辺

吾平町外から多くの方が、観光や遊びにみえる地域です。



① 吾平山陵

鹿児島県下の神代三山陵の一つとされており、全国でも珍しい岩屋の陵（お墓）で、神武天皇の御父君と御母君の御陵です。駐車場側から、見ていきます。

昭和天皇行幸記念碑は、昭和10年11月に鹿児島と宮崎で陸軍の大演習があった際に、昭和天皇が吾平山上陵〔吾平山陵と略記〕に参拝（行幸）されたのを記念して、翌年の11月に公爵の島津忠重氏が建立されました。ところが、昭和13年の台風による三日間降り続いた集中豪雨により、山陵から約6km上流側にある山中で土石流が発生して、その下流域は大災害に見舞われました。吾平山陵も一部が土石に埋没し、下流域の住民の死傷者が160余名に達しました。当時は全国の方から義援金や救援物資などをいただきました。

この昭和天皇行幸記念碑は岩屋の前に建っていましたが、上記の土石流で流失して行方不明になりました。平成2年の始良川の鹿児島県河川整備作業の際に、吾平山陵から4km離れた所で発見され、現在の位置に移築されました。この碑文の後ろの文言は、上皇陛下の家庭教師、学習院大学教授などをされた池田俊彦氏（大始良出身）によるものです。



門から奥が、宮内庁の管轄になります。最初の橋（上記左側写真）は、吾平山陵を災害から防護するために、昭和 13 年の大水害後に新たに掘削された放水路を横断する橋です。

昭和 37 年 5 月 9 日には当時の明仁皇太子（現、上皇陛下）と美智子皇太子妃（現、上皇后陛下）が参拝されていますが、当時の橋は杉で造られた太鼓橋でした。昭和 42 年に御陵内の橋は 3 橋ともコンクリート橋に架け替えられました。

高千穂峡の絶景スポットになっている「溶結凝灰岩の柱状節理」が、それより規模は小さいながら吾平山陵でも見られます。2 番目の橋から先の左側の崖です。一番わかりやすい場所は、最後の 3 番目の橋の左手の崖であり、典型的な柱状節理です。その他の場所にもあります。この崖を含め吾平山陵にある岩は、約 11 万年前に、高須沖の鹿児島湾内にある阿多北部カルデラの噴出物（火砕流）からできた溶結凝灰岩からなっています。火山の噴出物は高温から冷却する過程で、収縮して岩体に柱状の割れ目が入ることがあります。これを柱状節理（ちゅうじょうせつり）といいます。



参道の横に小さな建物があります。ここには宮内庁の事務所で、御陵の管理を担当されている宮内庁職員（嘱託）の方が一名おられます。ここは京都市伏見にある桃山陵墓監区事務所の管区になっています。山陵の御陵印も桃山陵墓監区事務所にあります。



この事務所の左側に杉科の大木が 1 本あります。中国の杉で、広い葉の杉と書いて広葉杉（こうようざん）と言います。樹齢は 400 年と推定されています。昭和 13 年の水害前は、参道の両側に大人 5、6 人が手をつないでも届かない広葉杉の大木が林立していて、荘

厳さがありました。広葉杉は中国原産で、成長が早く、軽いので家具によく使われているそうです。ただし、折れやすい欠点があるようです。



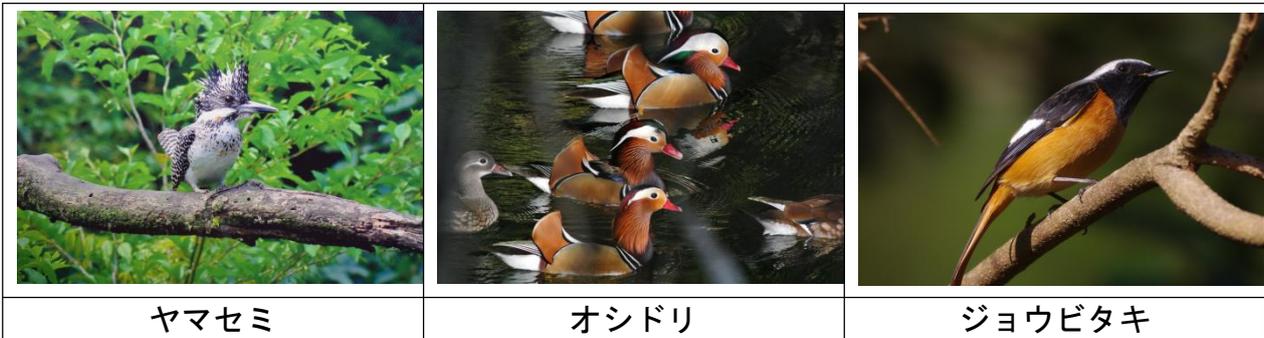
岩屋は東北に向かい、入口の高さは3m少し、奥行きが14.5m、横幅が23.6mあり、広さは297m²（約90坪、180畳ほど）です。その中に、高さ1.3m、周囲5m、その横に高さ0.9m、周囲3mの円形の塚が二つあります。大きい方がウガヤフキアエズノミコト、小さい方がタマヨリヒメの御陵と言われています。岩屋の中の御陵は、全国でも類を見ない貴重なものだそうです。吾平山陵は、別名「鵜戸山（ウドサン）」とも言われております。それは内部が空洞になっている場所を意味しています。祭神がウガヤフキアエズノミコト（鵜葺草葺不合命）であることにちなんで、「鵜戸」が当てられています。

なお、岩屋が御陵の場所に選ばれた理由には諸説があります。ブログ「鴨着く島」では、ウガヤフキアエズノミコトをキスミミ（東征せずに母親と吾平に残ったウガヤの次男）とした、以下の説を出されています。”吾平地方を含む古日向（投馬国）域においてそのウガヤ王朝末期に、今しがた述べたアマテラス大神に対するスサノヲの暴虐に匹敵するような台風や火山災害（もしくは南海トラフ地震・津波）に見舞われ、国が危殆に瀕して移住を余儀なくされたが、現地に残ったがために逃れられなかった首長（具体的にはキスミミ）がいた。しかし天災が過ぎれば再び首長の霊も古日向も復活するという想いが投馬国の人々にはあり、そのため暴風にも巨大災害にも強い洞窟に埋葬し、首長の霊とともに祖先の霊も祭られた。”大隅は災害多発地域であるので、説得力がある考えです。

吾平山陵は、四季を通じて人々の心を和ませてくれますが、特に春の桜と秋の紅葉は格別なものがあります。宮内庁管轄区域であるため、手つかずの自然が残されていて、野鳥など動植物の宝庫でもあります。

特におすすめは、春から7月の中頃まで鳴く「河鹿蛙（カジカガエル）」です。河鹿蛙は清流にしか生息しておらず、日本一の美声の持ち主です。その美声をYouTubeでも聴くことができます。なお、カジカガエルは小さく、こげ茶色をして不規則な斑紋があるため、周りの石と区別しにくく、簡単には見つけれません。





夏場には、川の中の石の上で甲羅干しをしているスッポンがよく見られます。上記写真は、吾平町在住の原村和好氏が吾平山陵で撮影されたものです。

吾平山陵には観光案内人が一人います。駐車場から見て左手の始良川の横に「吾平町物産展示館（〒893-1101 鹿屋市吾平町上名 5250 番地 1）」があり、その中で勤務しています。開館は火曜日から日曜日の午前 9 時半から 12 時半までで、月曜日は休館です。

電話（☎0994-58-5517）で申し込んでいただくと、吾平山陵のいわれ、歴史、自然などをご説明しながら、吾平山陵の一番奥の岩屋の拝礼場所まで無料でご案内します。事前の申し込み次第では、勤務時間外の案内も可能です。

② 県立大隅広域公園

ここは自然の宝庫で、植物や野鳥の愛好家が四季を通して楽しめるところです。また、スポーツ、キャンプ、遊びの施設が充実しています。アリーナに通じる道路沿いにある桜並木は見ごたえがあります。



③ 黒羽子観光農園

時期により、ぶどう（8月上旬~9月上旬）、ブルーベリー（7月下旬~8月下旬）、落花生（7月下旬~8月下旬）、スイートコーン（6月~7月）、いちご（1月~4月中旬）が収穫できます。入園料は無料です。2017年の情報ですが、落花生は 700 円/kg、ブルーベリーは 1,500 円/kg、ぶどう（巨峰・竜宝）は 1,300 円/kgで販売。

なお、農園に行かれる前には、収穫物の種類、開園時刻などを、吾平総合支所（☎0994-58-7257）か肝付吾平町農業協同組合（☎0994-58-7292）に電話で確認して下さい。



④ 黒羽子の隠れ念仏

黒羽子観光農園に入る道を、「かくれ念仏」と書かれた案内板に従って進むと、道に迷うことなく駐車場まで行き着きます。

駐車場から、片道 15 分くらいの山歩きです。山道は、地元の人達が年に 4 回整備しているので歩きやすいです。しかし、靴と衣服が汚れることを覚悟して、手袋と懐中電灯を持って二名以上で行かれることをお勧めします。雨の日は、坂道がぬかるんで滑りやすいので、行くのを取り止めにしたほうが良いでしょう。

最近では、安全のため洞穴に入るのを控えるようにと案内板に書いてあります。以前は懐中電灯を持って、狭い入口から身を屈めて洞穴内に入りました。右手に数メートル進んで突き当たると、左手に 8 畳くらいの広さの空間があり、ここに一向宗の信者たちが集まり祈りました。須弥壇跡には後世の人が置いた石仏と南無阿弥陀仏と書かれた石碑などがあります。周囲の火山灰起源の岩は柔らかく、天井には人が掘ったような穴もあります。地面は濡れています。



2 神野近辺

① 中岳と四滝

中岳は吾平富士とも呼ばれています。山裾には 4 つの滝があります。春は山桜が楽しめます。遠くから見ると、山にぼやけた白い斑点のように山桜が見えます。

下図のように、四滝巡りを含めて、3 つの登山コースがあります。



駐車場から浄水場まで歩いても私は息が切れ、更に山道に入ると急傾斜となります。地元の方々が林道を整備され、登山道沿いの木にピンクのテープを巻いて下さっているお陰

で、道に迷わずに前岳頂上（659.5m）に行き着きます。そこからは、遠くの高隈山までのパノラマがよく見え、爽快な気分が味わえます。

私は駐車場から約2時間かかって後岳頂上（677m）に着きました。下りは、林道に入り、途中から滝方面に林道を曲がって、四滝の一番上の「おしどりの滝」下の川に達し、岩伝いに川を渡って、滝巡りの林道に出ました。下りも駐車場まで2時間かかりました。

駐車場の横には、個人で飼育されているイノシシ牧場があります。人が近づくと、突進して来ることがありますが、柵から離れて見ていれば安全です。



中岳の裾にある四つの滝巡りも、驚きがあって楽しいです。下から杖立ての滝、一本松の滝、特攻の滝、おしどりの滝と名付けられ、侵食した巨大な大隅花崗岩の上を流れています。滝といっても、一般的な垂直の落ちる滝とは異なり、なだらかな岩盤の滝です。通常は、近寄って岩盤の表面を流れる滝の水に手で触れることができません（水量が多いときはできません）。

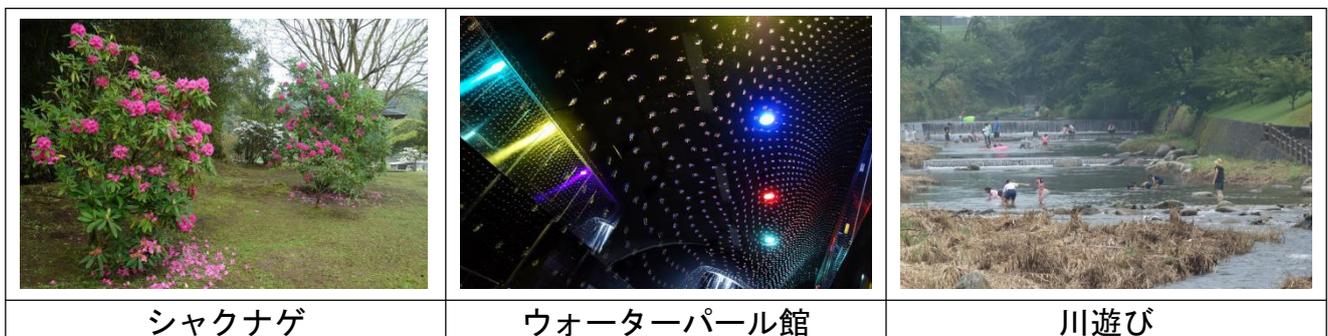
② 吾平自然公園

なだらかな丘に広場や幼児用の遊戯施設があり、シャクナゲがたくさん植えてあります。一番奥に、ウォーターパール館があり、水に特殊な音波を当て球体に変化させて水を流し（これでは落下速度が速すぎて人の目には一本の流れる水にしか見えない）、そこにストロボを使い水にライトを照射して、残像現象を利用して作り出した水玉です。しかも、ストロボの点滅速度を変化させることで、水玉が静止したり、ゆっくり上昇したりもします。子供さん達には科学への興味を持たせるキッカケになるかもしれません。

現在は、土・日曜日の9時から16時まで開館で、入館料は大人300円、子ども150円です。問合せは、阿多商店（電話0994-58-6931）に願います。

横を流れる始良川では、川に入って魚とりなどの川遊びができます。鹿屋市内では、唯一の安全に川遊びができる場所です。清流のため、カジカガエルも鳴いています。

近くにある旧神野小学校の校庭では、キャンプもできます。



3 苫野近辺

始良川の支流である、清流の苫野川の流域には、一般には広く知られていないものを含

めて、いくつかの名所旧跡があります。



① 立神(たてがみ)公園

吾平町の南部にある木場で、大きな岩の柱のような珍しい光景が見られます。吾平山陵方面から（544号線）と田代に通じる中央線（68号線）から行くことができます。

昨年（2019年）に、「鹿屋ふるさと探訪会」の会員を吾平町内の史跡を案内した折に、「立神公園」にも連れていきましたら、参加者が一番驚き、喜んでいただいた場所でした。参加者から「こんな場所があるとは知らなかった。」と口々に言われました。

平成4年に地元の人たちが中心となって整備して作った「立神（たてがみ）公園」です。道路横の、少し下がったところにあります。岩には、「立神」、「不動岩」「親子岩」などの名前が付けられ、それぞれ家内安全、五穀豊穰、安産の御利益があるとされています。そのため、パワースポットでもあります。

最近、地元の人たちが掃除・整備して、綺麗になり看板と立札も新しくなっていました。



この奇岩の成因を知りたくて、ネットで調べていたら、鹿児島大学応用地質学講座が開設している鹿児島県の地質関連情報サイト「かだいおうち」に、「鹿児島県の奇岩・名石」のページがありました。残念ながら、そこには大隅半島の奇岩の事例は載っていませんでした。しかし、そこに「他にご存知の石がありましたら、ご教示くださいと書いてあったので、写真を付けて、この奇岩の成因を教えてくださいと、メールを出しました。

早速、鹿児島大学 応用地質学の岩松 暉(あきら)名誉教授からご返事をいただきました。現地の地質図からいくつかの成因に関する地質情報とともに、「県立博物館長など県内の地質学者達に吾平町の奇岩について尋ねてみたが、誰も知らなかった。自分は高齢で現地に行けないので、まずは貴殿が岩石の種類を判定してほしい。」と書いてありました。

そこで、現地に行って、奇岩の周囲にあった転石数個をハンマーで割って、破断面を見たら、溶結凝灰岩に特徴的なユータキシティック構造（横方向に平たくなった組織）が見られました。その結果、奇岩の岩質は溶結凝灰岩と判定しました。

その破断面の写真を岩松先生に送り、先生から溶結凝灰岩とのお墨付きをいただきました。その結果、立神公園の奇岩の成因は、約 11 万年前の阿多北部カルデラの大爆発に由来する阿多溶結凝灰岩（阿多火砕流により厚く積もった火山灰と石が熱と圧密で固まった岩）の柱状節理を持つ岩体（岩が冷えて固まる際に収縮して柱が集まったように岩が割れたもの）の中で、風化に耐えて残った岩柱であると、岩松先生が成因の仮説を教えてくださいました。なお、溶結凝灰岩の岩柱は、溶岩のそれよりも一般に太いそうです。

以下に、阿多北部カルデラが大噴火してから、その火砕流が時速約 300km で海上を滑るようにして大隅半島に到達し、堆積して冷却過程で柱状節理を形成し、その後の風化に耐えて残った柱状の岩が現在の奇岩となった推測される経過を、順を追って図と写真で示します。



私は、玄武岩などの溶岩の柱状節理は知っていましたが、今回、溶結凝灰岩にも柱状節理ができることを初めて知りました。その後、「かだいおうち」の「鹿児島県の奇岩・名石」に、立神公園の奇岩も入れていただきました。

同様な形状の奇岩が、錦江町城元地区にあった旧立神（たちがみ）神社の近くにもあります。

なお、厚く積もった火砕流は、高熱と圧力で含まれるガラス物質が溶けて、硬い岩の溶

結凝灰岩になります。上層部は冷えやすいので溶けないで、風雨に洗い流されるため、下部の硬い溶結凝灰岩が平たい岩や台地のような形になって残ることがあります。



② 苦野の溶結凝灰岩

今年の4月に吾平町の平瀬地区にある知人宅に行った時に、裏を流れる苦野川を見に行ったら、川幅は狭いが、田代の花瀬川に似た景色であったので、驚きました。

花瀬川と同じように、扁平な岩にたくさんの薬草のセキショウが生えていました。セキショウがあるのは水がキレイなためです。



(仮称) 平瀬の百畳敷



花瀬の千畳敷の上流

この扁平な岩は、花瀬川や立神公園の奇岩と同じ、阿多火砕流の溶結凝灰岩です。上流にある硬い花崗岩が流れてきて、表面を研磨したり、溝を作ったと推測されます。下流側にある近くの橋まで、この景色が続くことを確認しましたが、上流の様子は不明です。花瀬川の景色は”千畳敷”と呼ばれています。ここは私が願いも込めて勝手に”平瀬の百畳敷”と名付けました。将来、吾平町の新しい景勝地になることを願っています。

③ 含粒寺跡

7代島津元久の長男・忠翁和尚が正長2(1429)年に建てた曹洞宗・福昌寺の末寺です。忠翁和尚は文安2(1445)年に亡くなりました。忠翁和尚の母(島津元久夫人)と妹の墓もありました。御南御前(16代肝付兼続夫人、島津忠良・日新斎の長女)の墓もあったと記す資料もあります。なぜ肝付兼続夫人の御南御前のお墓が、ここにあったのでしょうか。謎が多い寺です。

含粒寺は山中八景といって、当時は八つの美しい景色(山頂羅漢、屋後の瀑布、座禅石、南池白蓮、大谷藪竹、門頭屏風岩、囲山流水、寺前石橋)を見ることのできる場所でした。その中で、磨崖仏が彫られた「門頭屏風岩」は、県道561号線沿いで見ることができます。

含粒寺には、お坊さん等の墓が 28 基ありました。含粒寺は約 440 年間続きましたが、明治 2 (1869) 年に廃寺になり、大始良の南地区の玄朗寺と合体して移築されて、再興されました。廃仏後に再興されるのは珍しいことです。



4 始良川下流域

玉泉寺児童公園から北側の始良川下流域には、商店街、住宅地の他に田園地帯があり、いくつかの史跡があります。



① 玉泉寺児童公園

玉泉寺は応永 2 年 (1395 年) に越後出身の源翁和尚 (げんのうおしょう) が下野国 (しもづけのくに、今の栃木県) にあった曹洞宗泉溪寺の末寺として、この地に玉泉寺として開山されました。明治の廃仏毀釈にあい廃寺となり、現在は 20 代にわたる住職の墓と古い石塔を残すだけとなっています。和尚は、関東地方でいくつかの寺を建立し、最後は茨城県結城市の豪族に招かれて、結城氏の菩提寺を建立して、そこで亡くなっています。和尚を招いた吾平の豪族は誰であったのでしょうか。その名前は不明です。

玉泉寺は当時からの湧水が今でも枯れる事なく湧き出て、公園横の湧水は小鹿酒造の原料水として使われています。公園の中央には羽を広げた鶴を形どったといわれる清水の

池があり、鯉が泳いでいます。昭和 58 年（1983 年）に玉泉寺児童公園として整備され、園内では桜、藤、花ショウブ、ツツジ、サツキなど四季折々の花を楽しむことができます。清水であるため、薬草のセキショウと、香味野菜や薬草として使われるクレソンも自生しています。



② 始良川の土堤とその周辺の田園

始良川の整備が進んでいます。地元の方々が、クリーン作戦や鮎の放流などで、始良川の環境保護に協力されているお陰でもあると思います。

「湯遊ランドあいら」の近くにある更生橋から、一つ下流側の始良橋までの約 1.2km の間を「あいらさんぽ道」と呼んでいます。そこは、季節により、桜、菜の花、アジサイ、向日葵、コスモスが長いベルトのようにして咲き、散歩しながら楽しめます。特に、菜の花とコスモスの 1.2km の長い花ベルトは見ごたえがあります。

「あいらさんぽ道」の東側から北側にかけては、広大な田んぼがあり、穀倉地帯です。季節により変わる田んぼの風景も、のどかで心を落ち着かせてくれて良いものです。



③ 旧吾平駅

旧吾平駅は大正 9 年（1920 年）12 月 23 日「始良駅」として開業し、今年が丁度 100 年目です。なお、昭和 27 年（1952 年）1 月 1 日に「吾平駅」に改称しました。昭和 62 年（1987 年）に大隅線が廃止され、33 年経過しました。今では、この場所は貴重な史跡であり、施設・車両は文化財です。



④ 権現島

下名の井神島の南にある田の中の小山が権現島で、ここに伝説があります。この付近は肝付氏と島津氏が戦った場所と伝えられています。肝付勢は、この辺りのぬかるみに大木を浮かべ、島津勢を迎えました。島津勢は、ぬかるみと大木に悩まされて、けが人と死者がたくさん出たそうです。もちろん、肝付勢にも沢山の犠牲者が出たそうです。戦いの後で、死者とその鎧、兜、刀など多くの物を権現島に埋めたそうです。ところがその後、夏の夜には権現島から巨大な鬼火（青白い火）が、高山町の本城（高山城）へ向かって飛んで行くそうです。

権現島の頂上には、徳丸権現（徳丸神社）があるので、権現島と呼んでいます。この神社の神様は、鵜草葺不合命と猿田彦で、天文3年（1534年）に造られたと伝えられています。島津家11代島津忠昌は永正3年（1506年）に肝付家14代の肝付兼久の居城である高山城を攻めているので、伝説の両軍の権現島付近での戦いは、この時代の頃のことでしょう。なお、高山城での合戦では、肝付氏を支援する軍勢が多く、高山城は陥落せず、島津軍は鹿児島島に引きあげました。島津忠昌はその2年後に自殺しました。



⑤ 宮比神社

下名の井神島にある宮比神社は、別名を高目神社といい、天宇受賣命（アメノウズメノミコト）が祀ってあります。「始良名勝誌」には笈掛大明神と書かれています。笈掛大明神には、十六代肝付兼統の息災延命などを祈願した天文十三年（1544年）の棟札があったといわれ、約500年前の創建とされます。

古事記によれば、天宇受賣命は天岩屋戸の前に桶を置いて、足を踏み鳴らして、神がかりのようになって、胸を張り、腰に紐を垂らして、踊りました。その結果、岩屋戸に隠れていた天照大神を引き出すことができました。この時、神々が住んでおられる場所や地上も自然と日が照り、明るくなりました。また、天照大神が神々が住んでおられる場所から日向の高千穂峰に降りてこられた時、ニニギの命（天照大神の孫）に従う神の一人が待ち伏せしていたが、天宇受賣命がその神を従わせ、天照大神を守ったそうです。この手柄により、天宇受賣命の子孫は猿女君と名乗ることになったそうです。天宇受賣命は、今も芸能の神様として、多くの人から敬われています。



以上